No.26　　２０１７．６．１０／発行人：大庭　康二

◆ニュースレターおおば◆

平成２９年６月号

テーマ『初雫誕生。気候とワイン研究論文』

○…二七年九月号「北見地方のワイン」で取り上げたボス・アグリ・ヴィンヤードのワインが出来た。六月二四日に販売開始だ。酪農業を退職してからワインに魅せられ、ブドウ栽培から醸造までを目指そう、と北見市端野町緋牛内でブドウ栽培を始めた深田英明さん。十勝ワインの山幸、清舞、欧州系品種のシャルドネ、ピノ・ノワール、メルローなどの苗木を植えた。そのうち昨年一〇月、食用ブドウのキャンベルアーリー(赤)約二二〇キロ、ナイアガラ(白)約九〇キロを初収穫し、余市郡仁木町にある（株）自然農園ベリーベリーファーム&ワイナリー仁木に醸造を委託していた。

○…年が明け、このほど醸造が終了。キャンベルアーリーが三四三本、ナイアガラが四一本、瓶詰めされ、納品された。緋牛内の畑の横に建てられた直売所で六月二四日から販売される。

売価は一本(720ml)税込三千円、「初雫―赤」「初雫―白」のラベルで売り出される。近い将来、醸造設備を持ち、ブドウ栽培から醸造までを自分でやりたいと言う深田さん。「いろいろ経費もかかるが、皆んながワイワイ楽しく飲んでくれればいい。四年目でボトルになり、感無量だ」と話している。

○…北海道では近年、ワイナリーが続々、誕生している。土地の価格が安い側面もあるが、地球温暖化の影響から、ブドウ産地としての可能性に期待する声もある。従来、ブドウ栽培の北限の地と言われ、栽培されるブドウ品種も夏の冷涼、冬の寒冷を乗り越えられる品種に限定されていたが、品種の幅が広がってきている。気候変動とワイン用ブドウとの関連についての研究論文が発表された。

○…気候変動による北海道におけるワイン産地の確立―一九九八年以降のピノ・ノワールへの正の影響―。農研機構北海道農業研究センター/広田知良氏、山﨑ワイナリー/山﨑太地氏、池田町ブドウ・ブドウ酒研究所/安井美裕氏、北海道ワイン株式会社/古川準三氏ら十氏による共同研究。寒冷な北海道では栽培が困難とされていたピノ・ノワールがなぜ栽培可能となったのかを、農業における気候変動、温暖化影響などの気象学的な要因から解析解明することに関心を抱き、研究した。

○…論文では様々なデータをもとに考察が加えられているが、まとめによると①一九九八年の気候シフトを境に、後志地方の余市町や空知地方はピノ・ノワールの栽培の適温域に入った②一九九八年の気候シフト以降、北海道を含む北日本において、四月と八月の月平均気温の高い負の相関関係と八月と九月の正の相関関係が指摘されているが、四月高温と八月高温を比較すると八月高温の方がビン

テージ評価は高い。

○…冷涼な気候に向いている白ワインなら北海道でも可能だが、カベルネ・ソーヴィニヨンとかピノ・ノワールとか赤は北海道では難しい、と漫然と思っていたが、三笠・山﨑ワイナリーがピノ・ノワールで高い評価を得、可能性は大きく広がった。山﨑ワイナリーの努力は勿論だが、背景には気候変動もあることが分かった。このような研究が更に進んで、北海道から多様な、素晴らしいワインが造られることを期待する。

○…偉大なワインを産むボルドーとかブルゴーニュとか、ともすれば気候や土壌など自然条件に恵まれているから、と思いがちだが、ボルドーでは排水、ブルゴーニュでは土壌改良の努力があって今日がある、と言われる。適地だからいいワインが生まれたのではなく、適地でないがために人間が土地の欠点に見合った努力をして、初めていいワインが造られるようになった、という考え方が好きだ。北海道のワイン、北見のワイン、可能性は無限だ。